

浙江省における洞天福地の内部と 周辺及び同士の現状の調査報告

辻拓朗

はじめに

この報告は、法政大学探検部が2019年夏に中華人民共和国浙江省にて実施した、道教の聖地である洞天福地の調査の結果を収録したものです。

洞天福地とは、道教において仙人や不老不死などに象徴される神仙思想と、洞窟や山を崇拝するアニミズム的な思想である洞天思想とが、合わさったことで形成された、道教における聖地です。また、洞天福地は仙人の伝説の舞台にもなっていて、道教が普及している地域では中国全土に存在しています。

洞天福地周辺には道教の寺院である道観が建っており、道観が洞天福地を管理しています。しかし、道観による洞天福地の管理の仕方は場所によって様々で、整備して観光洞としているところもあれば、全く整備されておらず、草をかき分けて進まなければたどり着けなかなかないものや、そもそもどこにあるのかわからないものも多くあります。洞天福地については、唐の時代の道士である司馬承禎(647～736)が『天地宮府図』に、杜光庭(850～933)が『洞天福地岳瀆名山記』に記述を残しています。これらは洞天福地について言及されている最も古い資料の一つであり、そこでは、十大洞天、三十六小洞天、七十二福地という形で合計118か所の洞天福地の大雑把な場所と広さ、その洞天を治める者の名前のみが書かれていて、情報量が非常に少ないです。ただ各洞天福地での伝承や伝説を記述した資料は数多く存在しています。

道教の聖地である洞天福地の研究は、道教研究において必要不可欠な研究ではあるが、実際に洞天福地に足を運び、洞天福地の現状を調査している学者はごくわずかです。専修大学の土屋昌明氏は洞天福地の実地調査を行う数少ない道教学者です。土屋氏は、他の道教学者と協力して、2009年より洞天福地の実地調査を行っており、これまでにその成果を『洞天福地研究』(第一号～第八号)という研究誌で発表しています。しかし、彼らが調査できているのは118ある洞天福地全体の内のごく一部であり、また彼らは洞天福地の周辺の道観の様子やその周辺の調査を主体として行っており、洞内の調査をした記録はほとんどありません。洞天福地における洞内の様子は伝説上では、その大きさは千里とも万里とも言われることがあり、仙人伝説の舞台ともなっている洞天福地の実際の姿は未だ記録に残されていません。このような研究者が踏み込まない領域ではあるものの、行動力があれば学術的に重要な発見をすることができる洞天福地の調査は、研究者ではなく我々学生探検部員だからこそできる調査であると思っています。今回調査を行った洞天福地は大滌洞、金庭洞、括

蒼洞の三か所で、土屋氏や他の研究者が過去に調査に訪れている場所ですが、洞天福地内部には入ったことがない所です。この三か所であれば、経験の乏しい我々であっても、事前に現地的情報を仕入れることができ、洞窟に辿り着くことも他の場所よりも容易であると考え、今回の調査地としました。

今回の調査では、洞窟の調査だけではなく、道観を訪ねた際に、修行者の生活調査と彼らの持つ仙人像の調査を行いました。仙人のモデルであったであろう昔の修行者がしていた暮らしと現在の修行者の暮らしの違いはどこにあるのか、彼らの目指すもの、彼らの持つ仙人像などについて知ることができれば、現代における修行者の仙人観の解明及び、仙人の実像の解明につながるだろうと思われたからです。

本隊をご支援してくださった皆様、この度は誠にありがとうございました。皆様への恩返しとしてこの報告をさせていただきたいと思います。

第1章 活動概要

1. 調査目的と成果

〈調査目的〉

今回の浙江省における洞天福地調査は、大きく分けて二つの目的を達成するために計画された。

一つ目は、臨安県と余杭県の境に位置する大滌洞、天台県北部天台山の麓にある金庭洞、仙居県と臨海県の境に位置する括蒼洞の、三つの洞天福地に入洞し、その内部状況を測量とスケッチと写真により記録することであった。

各洞窟の近くには洞窟を管理する道観があり、大滌洞では洞霄宮、金庭洞では桐柏宮、括蒼洞では凝真宮がこれにあたる。このうち、桐柏宮と凝真宮については、土屋昌明氏が2009年に調査に訪れており、その時の記録を『洞天福地研究』第一号に記している。また、洞霄宮については、酒井規史氏が2012年に調査を訪れており、その時の記録を『洞天福地研究』第四号に記している。いずれも、道観とその周辺の様子についての記述があるが、洞内に関する記述はほとんどなかった。

二つ目の目的は、道観に住む道士への聞き取りによる、現在の道士の実態と、彼らの持つ仙人観、伝承で語られている仙人との三方向から仙人の姿の比較を行い、伝説上では超現実的な存在である、仙人の実像の解明を行うことであった。

〈成果〉

・洞天福地の現状調査

大滌洞においては、大滌洞への入洞、洞内写真の撮影、大まかな洞内の様子の

把握を行うことができた。また、村人への聞き込みによる、仙人洞と観音洞といったそれまで知られていなかった洞窟に関する情報を得ることができた。

天台においては、洞天福地と思われる洞窟が龍洞という名前で呼ばれていた(村人への聞き取りによる情報のみのため断定不可)。龍洞と呼ばれる洞天福地と思われる洞窟の位置情報の把握、龍洞が位置すると言われる岩壁の下部にある刻文の発見をすることができた。また、桐柏宮の道士への聞き取りにより、彼らの仙人観と彼らの生活についての把握を行うことができた。

括蒼洞においては、入洞、洞内写真の撮影、測量とスケッチによる洞内図の作成を行うことによる洞内状況の記録を行うことができた。洞天福地を測量した例は過去になく、おそらくこれが世界初となる。また、凝真宮の道士への聞き取りにより、桐柏宮の道士とはまた違う彼らの仙人観と彼らの生活の把握を行うことができた。

・仙人の実像の解明

道士への聞き取りにより、道士の実態、道士の持つ仙人像を聞くことができ、仙人という存在への理解が深まったが、今回は洞窟調査に多くの時間を取ったため、十分な調査を行うことができなかった。そのため今回は結論を出すことは不可能である。

2. 調査地域概要

今回調査を行った場所は、中華人民共和国浙江省の東部の天台県・仙居県・臨安区の三つの地域である。臨安では第三十四小洞天の天目山洞（大滌洞）、天台では第二十七小洞天金庭山洞、仙居では第十大洞天の括蒼山洞とその周辺の調査を行った。浙江省の省都は杭州であり、臨安へはタクシーで1時間ほど、天台、仙居へは高速バスもしくは列車に乗り3時間ほどで移動することができる。宿泊には外国人宿泊可能なホテルのみを用い、調査の際にタクシーで現地まで行き、日暮れ前にはタクシーで宿まで戻り、翌日またタクシーで現地に向かうということを繰り返した。以下に司馬承禎著『洞天福地天地宮府図』における、天目山洞、金庭山洞、括蒼洞の記述を記す。

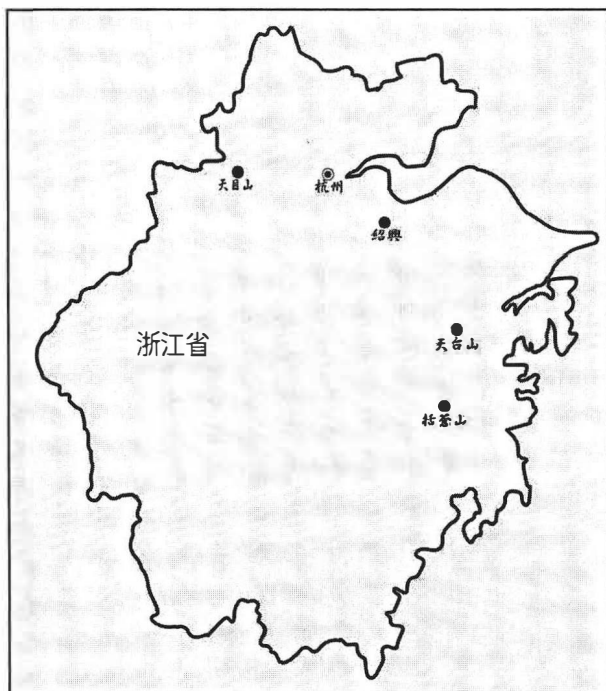
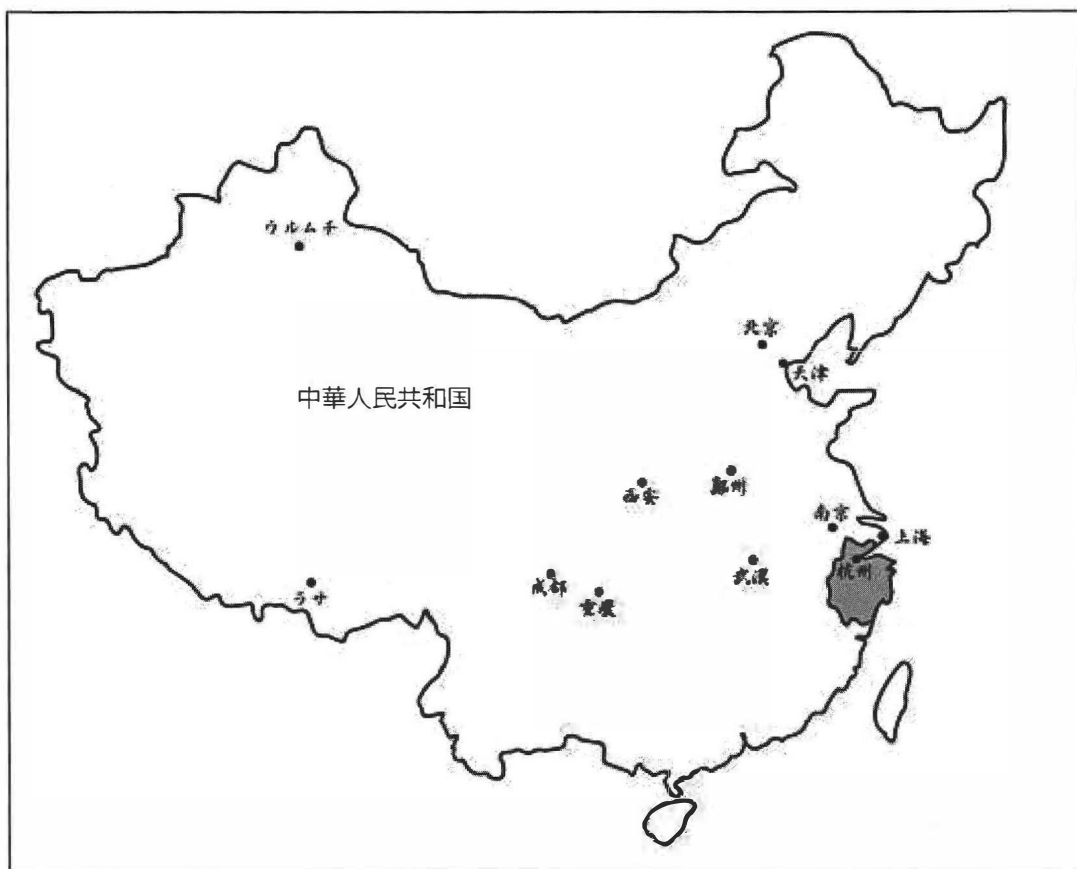
・第三十四小洞天 天目山洞

「周回百里、名を天蓋滌玄天と曰ふ。杭州余杭県に在り、姜真人に属して之を治めしむ。」

・第二十七小洞天 金庭山洞

「周回三百里、名を金庭崇妙天と曰ふ。越州剡県に在り。越仙伯に属して之を治めしむ。」

・第10大洞天 括蒼山洞



「周回三百里、号して盛徳陰玄の洞天と曰ふ。処州樂安県に在り、北海公涓子に属して之を治めしむ。」

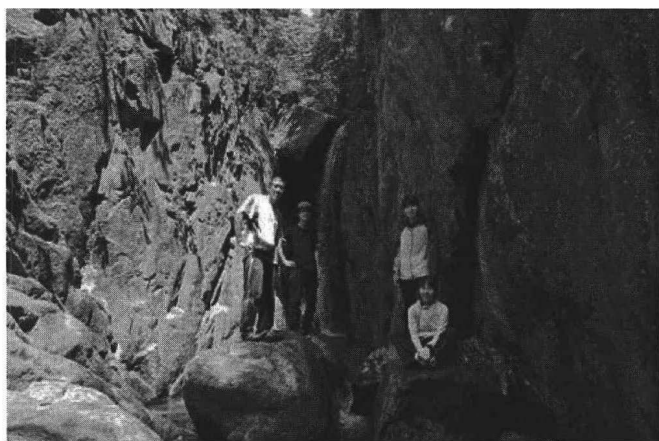
3. 隊の構成

隊長・撮影・渉外 辻拓朗(法政大学文学部哲学科三年 法政大学探検部三回生)
副隊長・医療 山崎秀真(法政大学人間環境学部人間環境学科二年 法政大学探検部二回生)

記録・装備・会計 関真生子(法政大学文学部心理学科三年 法政大学探検部四回生)

協力者 土屋昌明(専修大学教授)・森瑞枝(立教大学非常勤講師)

通訳 宋子健(天津師範大学国際教育交流学部日本語学科卒業・三重大学教育学部交換留学)

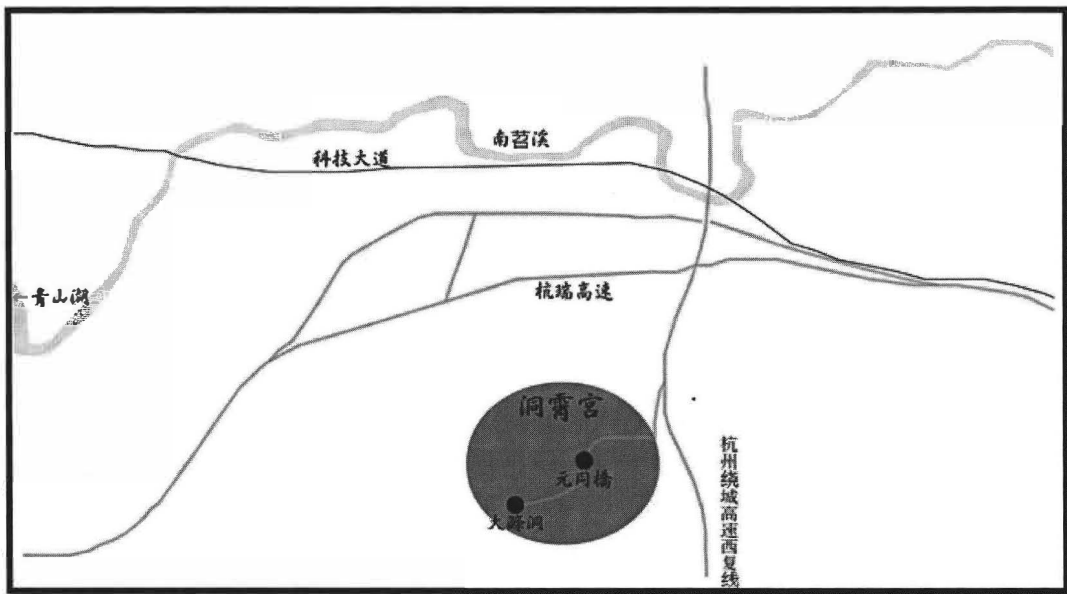
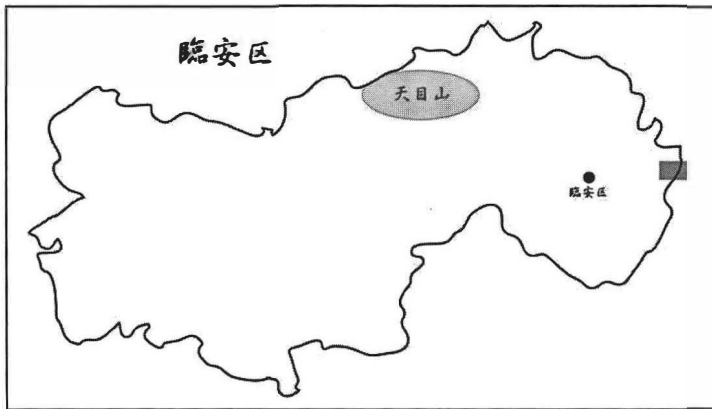


2019 夏 天台県石門坑にて(左から辻、山崎、宋、関)

第2章 活動成果報告

1. 臨安洞霄宮村大滌洞及びその周辺の調査

浙江省杭州市臨安東部の洞霄宮村に位置する第三十四小洞天大滌洞は天目山洞とも呼ばれている。しかし、前頁で概念図を見ればわかるように、天目山と大滌洞の位置は大きくずれている。大滌洞付近には司馬承禎が第五十七福地としている天柱山がある。大滌洞は洞霄宮のそばに位置し、洞霄宮は天柱山と大滌山の間に位置している。洞天の位置は時代によって変化するため、ある時期に第三十四小洞天大滌洞と第五十七福地天柱山が混同したと思われる。これについての詳しい叙述は、『洞天福地研究第4号』を参照していただきたい。



臨安区洞霄宮周辺の概念図

〈活動成果〉

- ・大滌洞の内部状況の把握
- ・周囲の洞窟（仙人洞、観音洞）の存在の認識
- ・周囲の洞窟の伝承の認識
- ・村人へのコネクションの確立
- ・現地の歴史の把握

大滌洞の洞口は、地面から4mほど落差があり、地面から2mほどのところまで、石の階段が続いており、そこからさらに2mほど落差がある。洞窟の天井高は10mほどであり、洞口上部は岩が削られた部分があり、そこには「大滌洞」と書かれている。地面には泥とグアノ（コウモリの糞）が堆積しており、

グアノの臭いも充満している。洞内は入り組んでおり、奥へは 20m ほど続いている。最奥部では、斜め下に直径 30cm ほどの穴があったが、そこに空気の流れはなく、先に長くは続いていないように思われた。高低差はほとんどないが、洞口から 15m ほどのところに、1m ほどの窪地がある。その窪地の手前には割れた電球が角材につるしてあり、電線が伸びている。そのほかにも、天井近くに角材が突っ張り棒のように、設置されていた。

大瀬洞の洞口は、地面から 4m ほど落差があり、地面から 2m ほどのところまで、石の階段が続いており、そこからさらに 2m ほど落差がある。洞窟の天井高は 10m ほどであり、洞口上部は岩が削られた部分があり、そこには「大瀬洞」と書かれている。地面には泥とグアノ（コウモリの糞）が堆積しており、グアノの臭いも充満している。洞内は入り組んでおり、奥へは 20m ほど続いている。最奥部では、斜め下に直径 30cm ほどの穴があったが、そこに空気の流れはなく、先に長くは続いていないように思われた。高低差はほとんどないが、洞口から 15m ほどのところに、1m ほどの窪地がある。その窪地の手前には割れた電球が角材につるしてあり、電線が伸びている。そのほかにも、天井近くに角材が突っ張り棒のように、設置されていた。

〈聞き取りによる成果〉

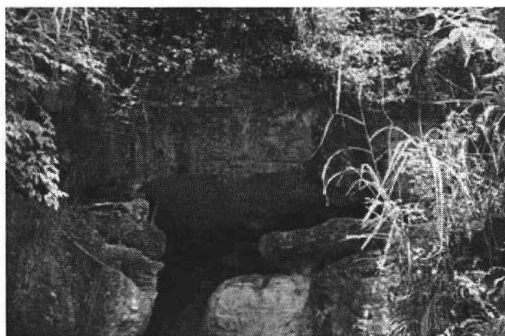
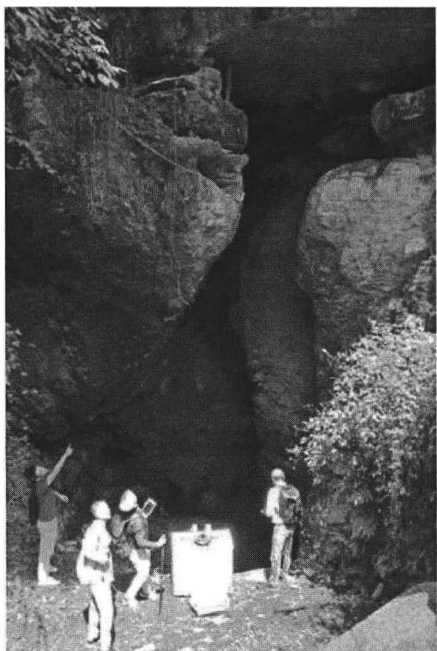
洞霄宮村の村人に聞き取りを行ったところ、以下のような成果が得られた。

一、洞霄宮周辺について地元民が書いた書物の拝見

聞き取りを行った村人の一人に、洞霄宮周辺について書いた兄がいるという方がいた。書物の著者はすでにご存命ではなかったため、話を聞くことができなかった。また、その兄を持つ女性も方言が強く、聞き取ることはできなかった。しかし、彼女と共にいた方の言葉は聞き取ることができたため、彼女に聞き取りを行うことになったのだが、彼女の自宅に目当ての書物が保管されていたために、拝見させていただいた。その中には、洞霄宮周辺にある、大瀬洞以外の洞窟の位置を表す地図や、それらの洞窟についての話がかかれていた。また、観音洞、仙人洞という二つの洞窟についての話を聞くことができた。観音洞の内部には修行者の座禅したままの死体があり、仙人洞には洞内に小さい洞窟が存在し、その奥には宝が眠っているということだった。

二、地元民とのコネクションの確立

地元民への聞き取りにより、洞霄宮周辺の大瀬洞以外の洞窟についての情報を得ることができた。これらの洞窟に入洞しようとして逮捕された者が過去にいたということから、調査を行うには地元民への協力を仰ぎ、行政に正式に許可を取る必要がある。その意味で、今回地元民とのコネクションを確立できたことは大きな成果と言える。



大滌洞洞口（左）
洞口上部の岩に「大滌洞」と書かれている（上）



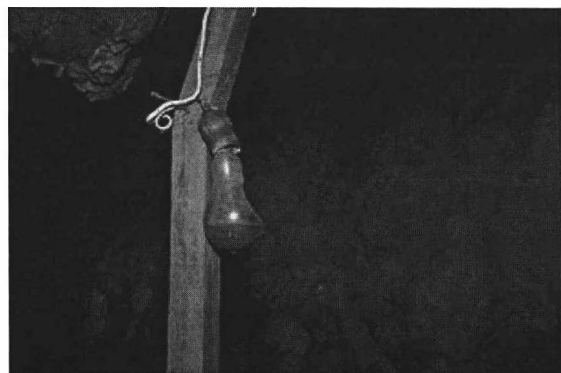
大滌洞洞口へ続く階段



大滌洞第二洞口



大滌洞洞内



大滌洞洞内に残された電球



大滌洞洞内は泥とグアノが堆積している



洞霄宮手前にある元同橋



元同橋 建設年などが刻まれている



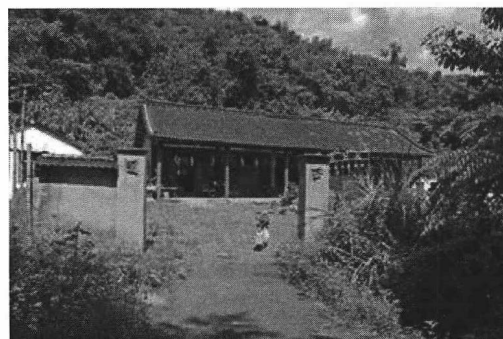
洞霄宮へと続く道



洞霄宮跡の基壇



聞き取りを行った村人



洞窟から北東 50m 程の所にある道観

〈道士の現状〉

洞窟から北東へ 50m ほどのところに位置する道観には、男女二人の道士が生活をしていた。二人とも歳は見た目からの推測で 30 ～ 40 代であった。二人は修行をしている様子はなく、道館で悠々自適に暮らしているようであった。洞霄宮を訪れた初日は、我々と土屋氏と森氏、さらに現地研究者、現地役人、風水師などが同行し、計 10 人ほどの大所帯で洞窟に向かった。その日は 30 分ほど洞窟を観察し、そのあと道士の話を聞くことができた。翌日、法政隊の三人と通訳の四人で大滌洞に入洞しようとしたところ、道士に制止されて、入洞することはできなかった。そのあと、天台の桐柏宮の道長に土屋氏が話を聞

いたところ、大滌洞を管理しているのは桐柏宮であり、洞霄宮に現在住んでいる二人の道士は桐柏宮とは全く関係のない人物だという。

〈今後の課題〉

今後の洞霄宮周辺での調査課題としては、

1. 測量を含めた大滌洞の内部調査
2. 洞霄宮周辺の仙人洞、観音洞などの未調査洞窟の調査
3. 洞霄宮遺跡の調査

の三つがある。

また、この三点を調査するにはそれぞれに解決しなくてはならない課題がある。

1. の大滌洞の調査を行うには、大滌洞の管理者である桐柏宮の道士に同行してもらうか、大滌洞に訪れた初日のように、役所に正式に許可を取る必要がある。その両者も今回の遠征で関係を築くことができたので、あとは交渉次第であろう。

2. の洞霄宮周辺の洞窟の調査を行うには、村人の協力が必須である。洞窟に関する情報は村人が多く持っており、それらの洞窟の所有権も村人にある。彼らの協力を得て、役所に正式に許可を採ることができれば、これらの調査も行うことができるだろう。

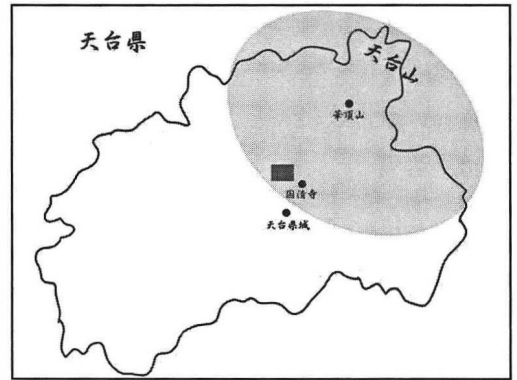
3. の洞霄宮遺跡の調査に関しては、1.2. 同様に役所の許可を取ることが必要になるだろう。さらに、調査時期としては夏以外の季節が適していると思われる。それは、今回9月に行ったときには、遺跡全体が人の背丈ほどの草木で覆われており、遺跡の一部分しか認識することができなかったからである。

2. 天台县石門坑桐柏宮付近の洞窟及びその周辺の調査

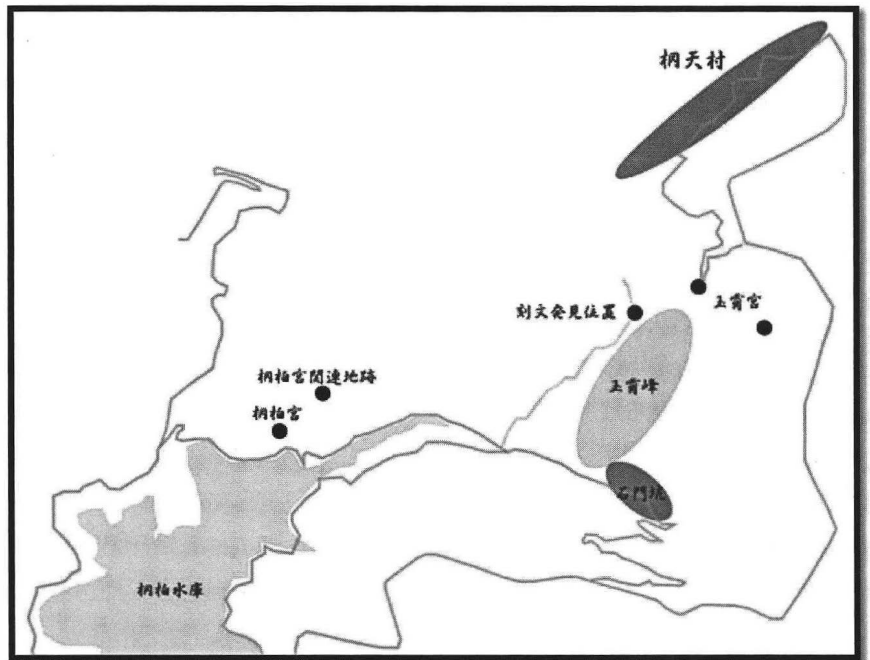
天台县の中の観光地である天台山には、道観である桐柏宮のほかに、仏教の国清寺があり、天台山の麓には第六大洞天であり赤城山洞を有し、済公信仰の聖地でもある赤城山がある。観光客は国清寺や赤城山に向かい、桐柏宮を訪れる観光客はほとんどいない。第二十七小洞天金庭山洞は天台山にあり、天台で最も大きい桐柏宮が管理しているということから、桐柏宮の近くの洞窟であると思われる。当地にまつわる叙述は『洞天福地研究 第一号』を参照していただきたい。

活動成果

- ・ 刻文の発見
- ・ 洞窟の存在の認識



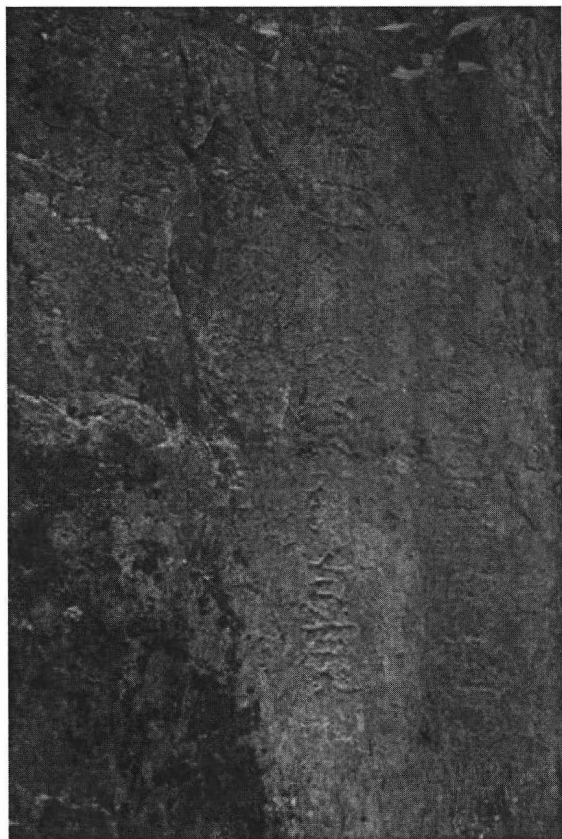
天台山桐柏宮周辺概念図



- ・ 桐柏宮関連地跡の全体像把握
- ・ 村人、道士とのコネクションの確立
- ・ 道士の現状把握

〈刻文について〉

洞窟があると言われているのは、玉霄峰から石門坑へと流れる沢沿いである。そのため、洞窟を探しに石門坑から沢を遡っていったところ、同行していた村人に途中の岩壁に刻文があることを教えていただいた。その刻文は水面から 3m から 2m ほどの間の 1m ほどの間に位置していた。文字がかすれていて、断片的にしか文字を読み取ることができなかった。記録については撮影とスケッチを行った。現在、刻文の写真は土屋昌明氏に提出しており、字体、刻文の内容などから、その刻文が刻まれた年代、刻んだ人物などの詳細を特定さ



刻文の様子 読み取りづらいが三行に渡り字が刻まれている
左：1行目 右：2行目

れることが望まれる。

〈聞き取り成果〉

今回は桐柏宮と玉霄宮の道士と、石門坑と桐天村の村人に聞き取りを行った。彼らの話は総合すると、刻文の上部に位置する、洞天福地だと思われる洞窟は、龍洞という名前であることが分かった。また、龍洞は宋の時代に徐林府という仙人が昇天したという話もあった。これは、徐林府ではなく、宋代に『天台山記』を撰した道士である徐靈府だと思われる。それは徐靈府がこの土地に深く関わった道士であり、時代も一致している。さらに、中国語の発音では「林」は lin（第二声）、「靈」は ling（第二声）であり、発音が非常に似ている。そのため、徐林府ではなく、徐靈府だと思われるが、今後天台、桐柏宮、龍洞の歴史に関する文献調査を行うことが望まれる。

〈道士の現状〉

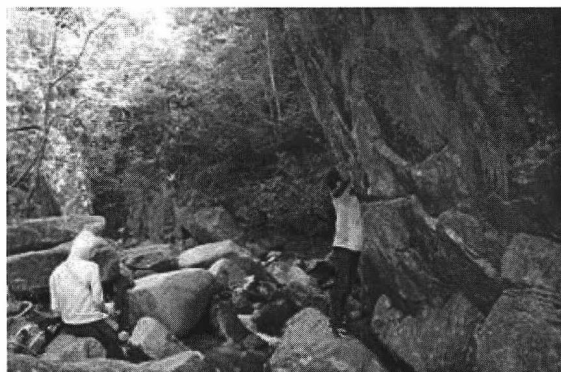
天台山南西部には桐柏宮という道観がある。この道観は道教学院（学校）も兼ねていた。桐柏宮は他の道観に比べても、その規模、大きさ、設備の充実が目立っていた。また、道士は一日のスケジュールが決まっており、熱心に修行に励んでいるようだった。また、聞き取りにより、神仙を目指して修行をしていることが分かった。



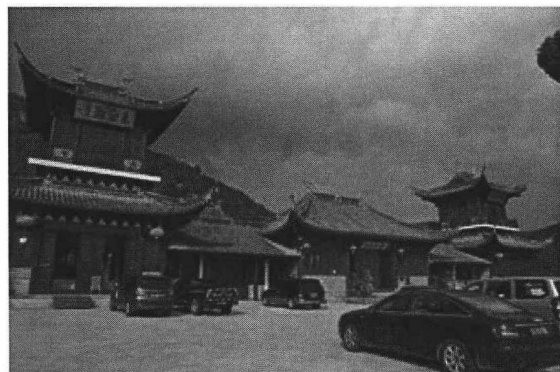
石門坑にて 写真中央の沢を遡ると洞窟がある



洞窟を目指して沢沿いの踏み跡を進む



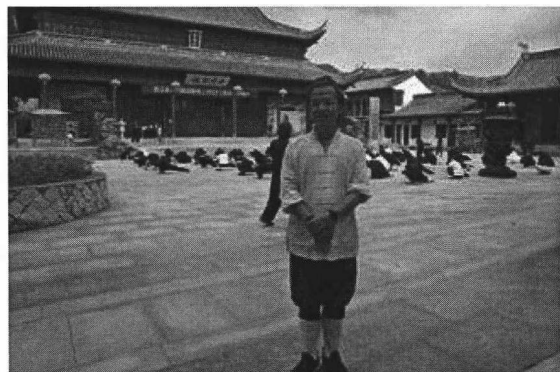
石門坑の刻文のある岩壁



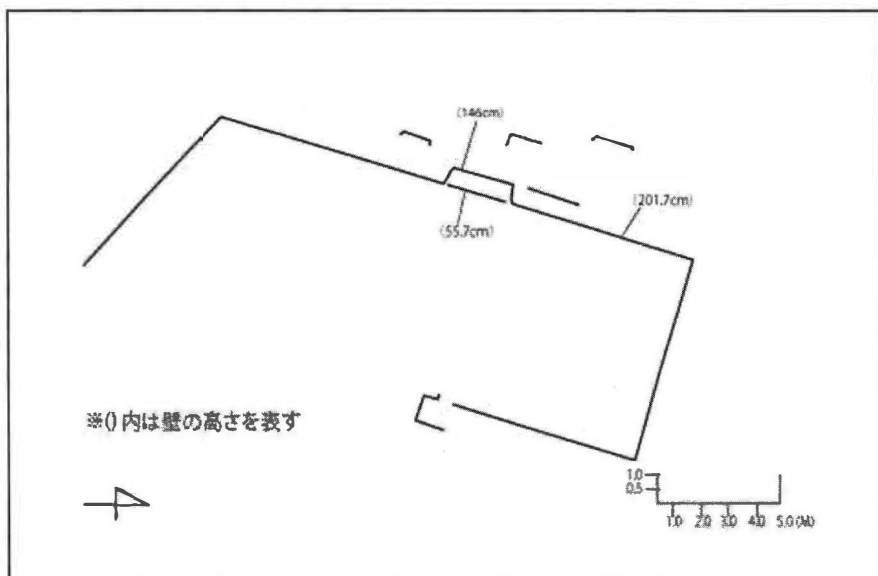
現在の桐柏宮門



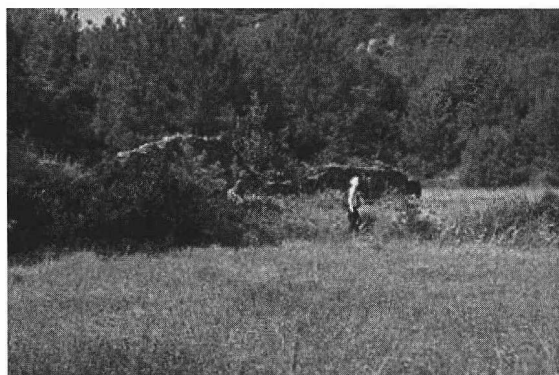
現在の桐柏宮



桐柏宮の道士である胡道長



桐柏宮関連地跡の全体像



桐柏宮関連地跡の石垣



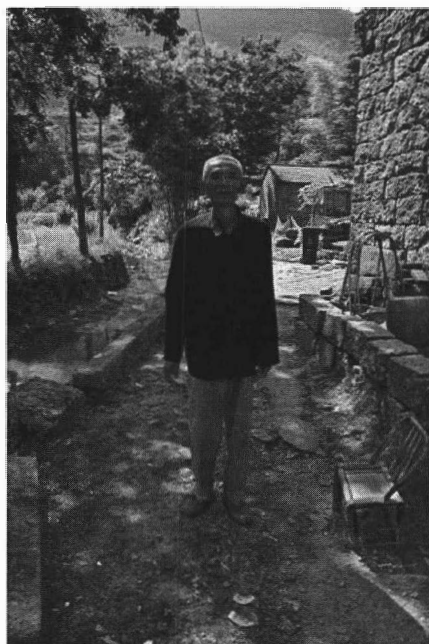
桐柏宮関連地跡の基壇



桐柏宮関連地跡の献花台



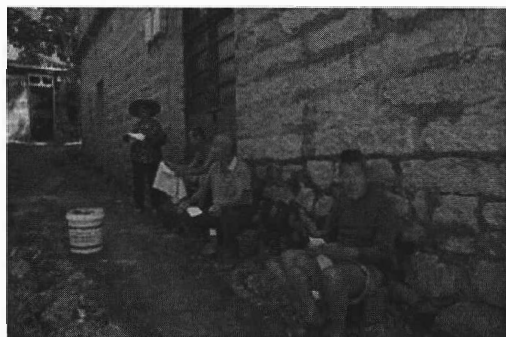
桐柏宮関連地跡の献花台



石門坑で聞き取りをした村人



桐柏宮ではお茶を飲みながら話を聞けた



石門坑で聞き取りをした村人

〈桐柏宮関連地跡調査〉

現在の桐柏宮の建物の裏山に桐柏宮跡地がある。現在の様子は基壇と石垣が残っているのみである。この遺跡の年代や建造物の配置等の詳細については、案内をしてくれた道士も詳細は知らなかった。

〈今後の課題〉

今後の桐柏宮周辺の課題としては、以下の三つが上げられる。

1. 龍洞下部にある刻文の詳細特定

刻文の記録が不十分で、詳細が特定できない場合は、再度現地を訪れて、拓本を採る必要がある。

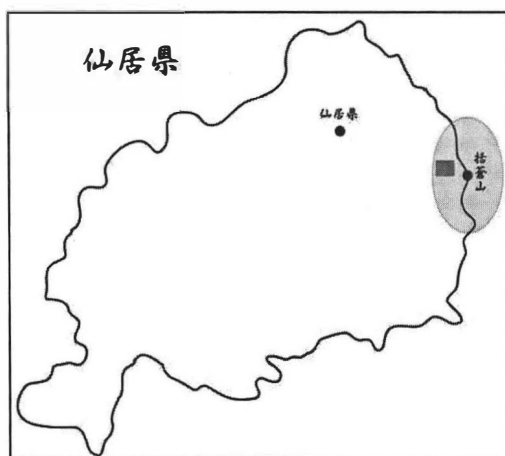
2. 龍洞への入洞、内部調査

村人の話によると、龍洞は刻文のある岩壁の上部にあるという。一度岩壁を巻いて登ることを試みたが、危険と判断し洞窟搜索は取りやめた。その岩を登るには登攀装備を使用しなければならないが、その場合は、通報される危険性も高まるので、桐柏宮、公安に許可を取る必要があるだろう。

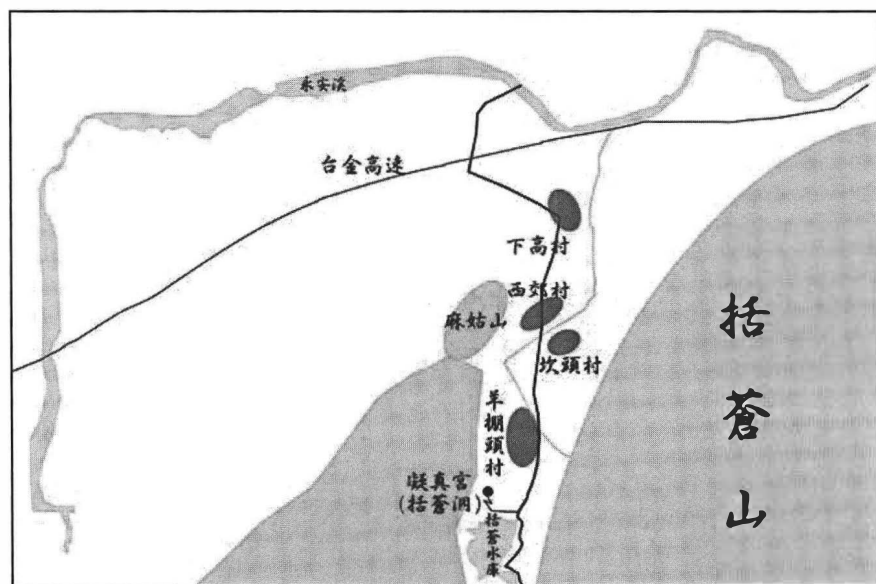
3. 桐柏宮関連地跡の詳細な調査

今回全体を大まかに測量した、桐柏宮跡地については、再度道士への聞き取り調査と文献調査を行い、桐柏宮の歴史を調べることで、より詳細に測量を行うことが望まれる。

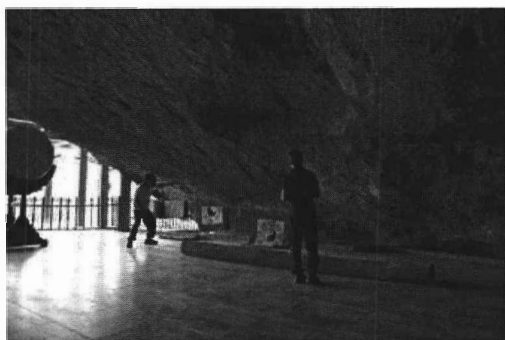
3. 仙居県括蒼洞及びその周辺の調査



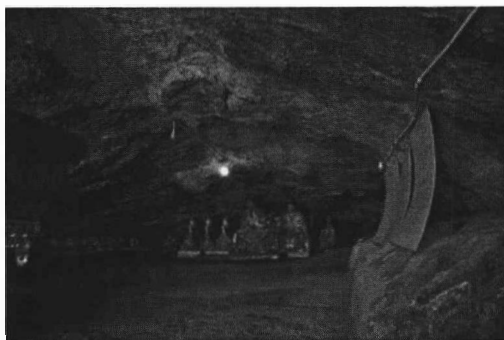
括蒼山凝真宮周辺の概念図



括蒼山は余杭県と臨海県の県境に位置する山塊である。この括蒼山の西側余杭県側の麓に括蒼洞、括蒼洞を管理する凝真宮がある。詳しい当地の叙述は『洞天福地研究』第一号を参照していただきたい。



括蒼洞ホール部分



括蒼洞ホール部分 奥には神像が見える



ホール部分に残る洞内工事の跡



括蒼洞ホール部分の鍍丹跡



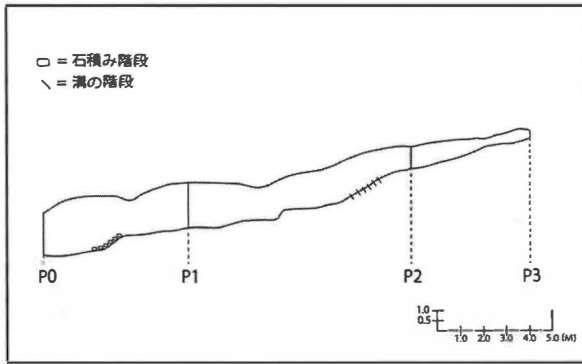
括蒼洞支道の階段



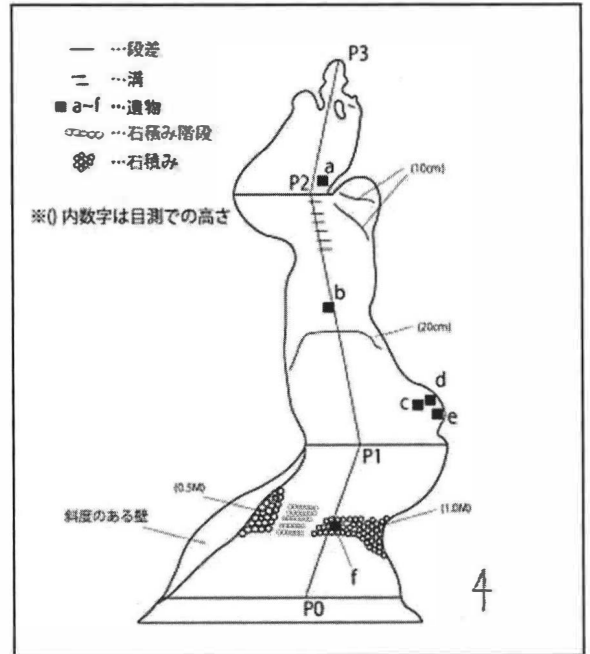
括蒼洞支道 測量調査の様子



洞内に置かれた金龍のレプリカ



括蒼洞支道の洞内図（縦断面図）



括蒼洞支道の洞内図

〈成果〉

- ・括蒼洞の測量
- ・現代における道士の現状把握
- ・地元党委員会へのコネクションの確立
- ・麻姑岩登頂

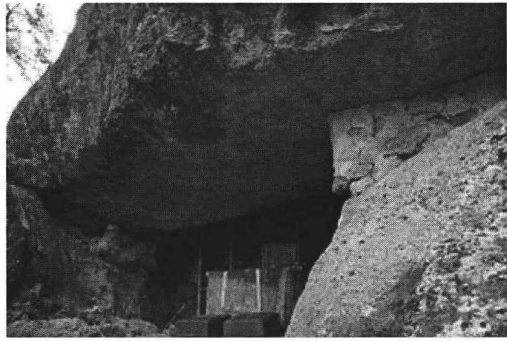
〈括蒼洞の内部状況〉

括蒼洞は凝真宮内部に存在する洞窟である。岩壁に括蒼洞が存在し、その岩壁に沿うような形で、凝真宮が建っているという形である。そのため、括蒼洞への入洞は道観を通らないと行うことができない。

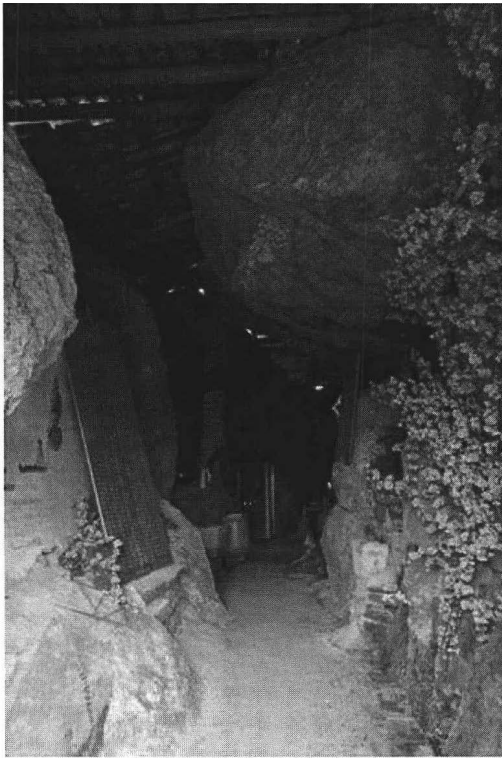
今回は、道観の案内をしてくださった若い道士に、凝真宮の入洞・測量を願い出たところ、快諾してくれた。内部は、洞口から奥行 20 m ほどまでは、幅 20 m ほど、高さ 3m ほどの空間が広がっており、底部はコンクリートで固められ、平坦になっている。洞口から正面 10m 先には線香台が備えられており、その 10 m 先には神像がまつられていた。神像の写真撮影は禁止されたため、その様子は記録できなかったが、見るからに新しい神像であった。また、洞口から 20m 進むと、斜め右へと延びる支道が存在する。その支道はコンクリートで固められてはおらず、泥とグアノが堆積していた。その支道からは 2009 年に金龍が発見されている。金龍の発見の詳細については、『洞天福地研究』第一号を参照していただきたい。



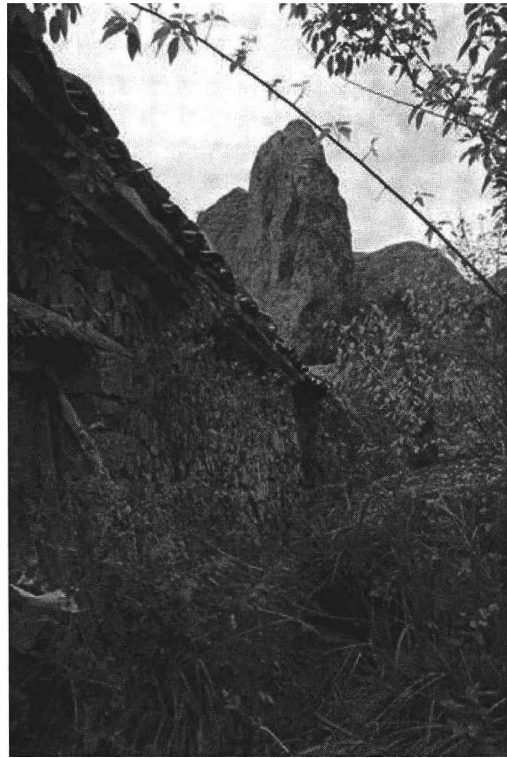
凝真宮内部に括蒼洞がある



麻姑岩山頂手前岩陰に造られた廟



麻姑岩山頂の廟



麻姑岩山頂

〈道士の現状〉

凝真宮の道士は10人前後であった。我々が凝真宮を訪ねた際は、道長が不在で留守番をしている一人の若い道士の他は、古い道観の整理と、新しい道観の修理に追われているようであった。彼らは、働かないと生きていくことができず、修行を行うことはないと言っていた。

〈聞き取りの成果〉

『洞天福地研究』第一号によると、凝真宮の道長である聞道長の話で、括蒼

洞の他に、周辺に十六の洞窟があり、それらの内部にはどこも鍊丹の跡があるが、現在それらの洞窟を管理する者がいない、というものがあつた。括蒼洞は道観内部にあり、事前に場所も管理されていることも分かつていた。そのため今回、凝真宮を訪れた大きな目的の一つは、括蒼洞周辺の鍊丹跡が残る洞窟の調査をすることであつた。

しかし、我々が凝真宮を訪れた際には、問道長は不在であり、接待をしてくれた若い道士に周辺の洞窟について尋ねるも、何も情報を得ることができなかった。その後、凝真宮周辺の村人に聞き取り調査を行ったが、周辺の洞窟に関する情報は得ることができなかった。

〈麻姑岩登頂〉

凝真宮周辺の村への聞き取り調査で括蒼洞周辺の洞窟についての情報は全く得られなかったが、麻姑岩（仙姑岩）の山頂に洞窟があるという情報を得た。麻姑岩は第十福地丹霞洞があると言われているが、土屋氏が『洞天福地研究』第一号にて麻姑岩を訪れた様子が記されており、そこでは、麻姑岩付近に洞窟があるという話だが、現地の認識では、第十福地とは洞窟そのものではなく、南北の峰に挟まれたやや広い空間がそれであるという。麻姑岩に関しての詳しい叙述は『洞天福地研究』第一号を参照していただきたい。

今回我々は麻姑岩に登ったがやはり洞窟はなかった。山頂には廟があり、真新しい神像や壁画があつた。また、山頂から 100m ほど手前には、仏教の廟があり、そこにいた村人に聞き取りを行うと、その内の一人はその廟と山頂の廟を管理している女性であつた。彼女に話を聞いたが、彼女は仏教徒であり、山頂の廟にある神像に関しての質問をしても詳細を知らない様子で、麻姑岩周辺の洞窟についての情報も得られなかった。

〈今後の課題〉

括蒼洞については、道観の管理と整備が行き届いており、調査の必要はない。今回手掛かりをつかむことができなかった括蒼洞周辺の十六の洞窟についての調査を進めることが第一に求められる。そのためには、文献調査と今のところ唯一、十六の洞窟についての情報を聞くことができた、問道長への聞き取り調査を行い、そこから得られた情報を元に、現地での聞き込みを行うという流れが適切と思われる。

第3章 参考資料

1. 行動経過

◎ 9/6

活動初日は1つ目の活動地である杭州へ移動した。辻・山崎・関の全隊員が羽田空港に午前集合し、正午の便で日本を発った。同日の夕方上海虹橋空港につき、列車にて杭州まで移動。深夜に予約していた杭州のホテルに到着。夕食と買い出しを済ませてホテルに戻り就寝した。

◎ 9/7

この日は杭州・洞霄宮村にある大滌洞の調査1日目であった。隊員達は通訳の宋子健と杭州駅で合流し、タクシーで臨安にある事務所へと向かった。ここで土屋氏と森氏、氏の調査に同行する現地の方々と合流し大滌洞へ向かった。大滌洞から北西50m程の所に、小さい道観が建てられていた。道士が2人住み着いており、彼らに聞き込みをした。正午ごろに出洞した。

◎ 9/8

大滌洞の調査2日目は、学生隊員と通訳の宋でタクシーにて現地を訪れた。大滌洞に到着し洞窟前で入洞準備をしていると、前日聞き込みをした道士に止められた。トラブルにならないよう一旦大滌洞を離れたところ、洞霄宮村の70歳代くらいの女性3名に声をかけられ、洞窟のことを話すと、その一人の弟が村の洞窟について本を執筆したことがあり、本を見せていただけるとのことで女性たちの家に向かった。女性たちの一人からは特に詳しく洞霄宮村や周辺の洞窟について話を聞かせていただき、村長は不在であったが副村長からお話を伺うこともできた。大滌洞の調査はこの日が最後で、聞き込みを行った後はタクシーで市街まで行き、高速バスで天台市街地のホテルへ向かった。

◎ 9/9

天台山調査の1日目は、土屋氏と天台山の道観である桐柏宮の道士達と共に行動した。道士が車で土屋氏と我々を迎えに来てくださり、道士達が行ったことがあるという石門坑にある洞窟へ案内してもらった。洞窟へのアプローチは沢沿いの踏み跡で山に入っていく、山中の斜面に洞窟があるとのことだったが、場所を特定することができなかった。沢の途中で休んでいるとそこに石門坑の共産党書記が現れ、磨崖があることを教えて下さり、一同で見に行った。この日洞窟は見つからず、下山して桐柏宮を訪問した。桐柏宮では道士たちが普段食べている食事をいただいたり、修行の様子を見させていただいたりした。その後土屋氏と道士達と共に、桐柏宮の近くの山中にある、石積みだけが残っている桐柏宮関連地跡を訪問した。土屋氏と森氏と行動したのはこの日で最後である。

◎ 9/10

この日以降は土屋氏、森氏とは別行動で調査を行なった。タクシーに乗車し桐柏宮を訪れて挨拶を済ませたのち、前日に見つけることができなかった石門坑にある洞窟を探した。まず磨崖の詳細な撮影とスケッチを済ませ、その後、書記が磨崖のある岩壁の上部に洞窟があるという証言を元に先に進むも、途中で断崖に近い急斜面に阻まれ、藪も濃く視界が不良だったため撤退した。その後石門坑でより詳しい情報の聞き込みに専念することにした。

◎ 9/11

前日に聞き込みをしたものの決定的な情報を得られなかったため石門坑で聞き込みを続け、一通りの村人から話を聞かせていただくことができた。やはり磨崖の上に「龍洞」という洞窟があったらしいことが分かったがアプローチが危険で装備に不安があるため今回は調査を断念した。代わりに2日前に訪れた桐柏宮の裏山にある桐柏宮関連地跡の測量を行なった。

◎ 9/12

天台での調査4日目にして最終日だったこの日は、洞窟がある山を挟んで石門坑と反対側にある桐天村という村で聞き込みを行なった。桐天村の共産党事務所の前では「洞天福地」を「桐天福地」と1文字変えてPRしているポスターもあり、洞天福地と桐天村には何か関連があることが期待できそうだった。しかし、聞き込みしても洞窟について知っているものは誰もおらず、共産党員に電話をかけるも繋がらなかった。その後玉霄宮という近くの道観を訪れ、龍洞や他の周辺洞窟に行ったことがある道長の女性から話を聞くことができた。その後龍洞を案内していただけるという話にもなったが、雨のため取りやめになった。

◎ 9/13

この日は次なる調査地である仙居県に向かう移動日であった。午前中に天台を出発し、昼過ぎにバスで仙居県に到着した。その後ホテル近くの書店で仙居県の地図を購入した。

◎ 9/14

仙居県での調査1日目は、括蒼山にある凝真宮という道観を訪問した。新人道士の案内で、凝真宮とその内部に存在する洞天福地の第十大洞天・括蒼洞を見学させていただいた。道士に内部測量の許可をいただき、測量を行なった。凝真宮の道長は他にもいくつか洞窟があることについて知っているようだったが、この日道長は不在で、他の日も忙しく対応が難しいとのことだった。他の

道士も作業をしていて不在であったため、凝真宮から最も近い集落である羊棚頭村で聞き込みをした。

◎ 9/15

前日の聞き込みで洞窟に関しては括蒼洞以外の洞窟の情報は得られなかったが、近辺に仙姑岩（麻姑山・麻姑岩）という山の山頂に道教の廟が存在している場所があり、そちらを訪れた。40 分ほどの登山で山頂に至り、そこは奇怪な巨岩に挟まれるような形で屋根が通っていて、その下にはいくつもの神像と祈るための祭壇などが配置されていた。仙姑岩の登山口付近の集落にも洞窟について聞き込みを行なったが、他の洞窟についての有力な情報は得られなかった。

◎ 9/16

この日は仙居県にある図書館で文献調査を行なった。その結果、括蒼洞以外の洞窟について名前や大まかな所在地、特徴などが記された資料を見つけることができた。図書館の方に事前に土屋氏にご紹介いただいた仙居県の共産党書記の楊さんについて何か知らないか尋ねたところ、その人に連絡を取って下さることとなり、急遽その楊先生という方とお会いできることとなった。また、仙居県の図書館長である余さんも同席して下さった。楊さんは土屋氏が十年ほど前に行なった括蒼洞調査にも同行しており、『括蒼詠譚』という本を執筆されていた。お話を伺ったのちホテルに戻ると、楊さんが我々のホテルを訪ねていらっしゃり、翌日我々が訪問することに決めた、仙居県に現存している他の道観である陰真宮に我々を案内するよう連絡を入れて下さった。

◎ 9/17

この日が4 日目で仙居県の調査最終日であった。前日楊さんが教えてくださった、仏教と道教が融合している道観を訪れた。前日楊さんが連絡して下さった共産党員の方が案内してくださり、その道観の方からお話を聞かせていただき、その後その道観にあった石碑の一部が保存されているという共産党事務所に広報長を訪れた。石碑について説明していただき、またその方から他にも人一人ほど入れる洞窟を有した道観陰真宮があるという情報を聞いてそこに向かった。しかしそこはかつて道観だったが今は仏教寺院に改築されていた。その寺院の奥には確かに人が一人座れるほどの小さな洞窟があった。陰真宮を去り、その後共産党員の職場で一緒に社食をいただいた。洞天福地の現地調査はこれで実質全行程が終わりとなった。

◎ 9/18

この日は仙居県のホテルをチェックアウトし通訳の宋と別れ、列車にて上海へと移動した。

◎ 9/19

この日は翌日の朝早くに出る便に乗るため、余裕を持って1日予備日としていた。夜までに空港に移動し、空港で夜を明かした。

◎ 9/20

帰国日となるこの日は早朝の便で上海浦東空港を発ち、同日夕方に成田空港に到着し活動終了、解散した。

おわりに

今回の活動を実行し、この報告書を完成させることができましたのは、ひとえにお力を貸してくださった皆様のおかげです。計画段階から多くの事をご教授くださった専修大学教授の土屋昌明先生、立教大学非常勤講師の森瑞枝先生、今活動実施に当たって、様々なご支援とご指導をしてくださった、法政大学探検部及び同部OB会の皆様、今活動において計画発表及び報告の場を用意してくださった関東学生探検連盟の皆様、2週間通訳として我々と同行し、活動中のサポートをしてくださった宋子健様、そして今回我々が調査に訪れた際、洞窟調査や聞き取りに協力してくださった皆様に心から感謝いたします。

今活動では、我々の知識、調査経験の乏しさ、調査期間の短さ等の理由に寄り、決して十分な学術調査ができたとは言えません。しかし、今回本計画を実施したことにより、調査地域の概要を把握し、大滌洞、括蒼洞への入洞及び洞内撮影、測量を行えたことは今後の調査につながる成果と思っております。私自身、今後も洞天福地の調査を継続していく所存でありますので、今後ともお力添えをしていただければ、幸いです。